

新城道彦・浅羽祐樹・金香男・春木育美著 『知りたくなる韓国』

有斐閣, 2019年

評者は、地域研究を専攻した院生時代から約30年間、韓国を知るために、韓国に通い続けてきた。大学という場で働くようになってからは、わずかな休暇期間に韓国に出かけ、その社会や人びとの営みを肌で感じ、韓国について知り理解しようとしてきた。しかし、2020年の今年、この試みを実行できそうにない。

もちろん、韓国を知るといふ試みは、実際に韓国に行かなければできないというわけではない。日本に住む人びとにとって、いまや韓国にかんする情報は、日本にいながら多種多様なかたちで入手できる。ただし、多くの一般の人びとの目につくのは、マスコミやインターネット上でとりあげられる情報であろう。それら情報は、個別の情報として貴重であり、それらを通して、人びとは韓国についての事実や認識を知ることができる。

このように、日本にいながら韓国を知ることが、日常的な情報入手の試みによって実践できるが、韓国という国や社会を総体的かつ体系的に知りたいという場合は、また別なかたちでそれを試みる方法がある。それは、韓国という国や社会の全体像を説明してくれる入門書を読むという方法である。

なかでも、韓国研究の専門家によって書かれる学術的な入門書では、出所が明らかな事実やデータに基づいて、韓国を知るために基本的に必要とされる諸事象が説明されている。そのような入門書を読む人は、韓国を総体的かつ体系的に知ることができる。また、それだけでなく、そこで知った事実や認識をもとにして、日常的に入手する情報を自分なりに解釈できるようになる可能性がある。

評者も入門書を読んで韓国を知るといふことを試みてきた。手元にある入門書のなかから、現代

韓国を扱った3作品をあげてみる。

まず、伊藤重人編『もっと知りたい韓国【第2版】①②』である(伊藤編1997a; 伊藤編1997b)。本書は執筆者が17人で、歴史的な伝統からはじまり、民俗信仰や文芸、芸術、経済、政治、社会変動にわたるまで、幅広く現代韓国の諸相をとりあげている。つぎに、小倉紀蔵編『現代韓国を学ぶ』である(小倉編2012)。本書では、9人の執筆者によって、日本人の韓国認識、韓国の文化、言語と文学、歴史、社会、政治、経済、外交・安全保障、日韓関係、世界に暮らすコリアンなどが説明されている。さいごは、石坂浩一・福島みのり編『現代韓国を知るための60章【第2版】』である(石坂・福島2014)。本書では16人の執筆者が、政治、社会、経済、文化の分野における60の事象を解説している。

これら入門書は、執筆陣の専門性を反映して、それぞれ固有の特徴をもっている。たとえば、伊藤編(1997a; 1997b)は、初版の執筆者が主に文化人類学・民族学の研究者であったことから、それら領域の知見を生かした内容が充実している。しかし、3つの入門書に共通する点は、多岐にわたる事象についてそれぞれの専門家が説明しているため、読者はより深く韓国について知ることができるということ、そして、深く知ることが韓国をもっと深く知るための原動力になる可能性を秘めているということである。

本書評の対象である『知りたくなる韓国』は、評者が手に取る最新の韓国入門書である。本書を入門書とみなす理由は、「はしがき」に、「イメージの殻を打ち破って韓国の実像を知る、そしてさらに知りたいという意欲を掻き立てる、それが本書の目的です」とあるからである。韓流ドラマなどの娯楽から得られる情報、そこから築かれるイ

メージは、韓国を知るのに役立つ。しかし、もう一步踏み込んでその実態を知って、より深く韓国を理解してもらいたい。このような意図から、目的は立てられた。

本書は、歴史・政治・社会・文化の4部構成で、各分野を一人の著者が執筆している。順に内容を紹介していこう。

「第I部 歴史」は、新城道彦氏が執筆者である。第I部が扱う時代は、朝鮮王朝時代から大韓民国時代とされるが、具体的には、高麗末期から民主化以前の全斗煥政権までである。

「第1章 朝鮮王朝時代」では、朝鮮王朝の誕生から終焉までの事象が、主に王朝の動向を中心に記述されている。前半では、歴代王の名称や生活の様子、側室や宮女の世界が描かれる。王の「制約だらけで息苦しい毎日」や宮中で下働きをした宮女の「不幸な境遇」は読者の関心をひきつける事実であろう。後半の内容は、19世紀以降王朝衰退期の政治体制や情勢である。この時期の勢道政治、親族間での権力争い、王朝滅亡までの政治的展開が時系列的に説明される。朝鮮王朝は、日清戦争後の下関条約の締結によって清からの独立が承認され、1897年に大韓帝国へと変貌した。

なぜ国号が「朝鮮」から「大韓」に改められ、「帝国」が名乗られるようになったのか、また、日本はなぜ政治的にも経済的にも腐敗した大韓帝国を併合したのか。これらについて解明するのが、「第2章 大韓帝国～日本統治時代」である。前半で大韓帝国の誕生と韓国併合がとりあげられ、さきの問いに対する答えが示される。後半では、3・1運動と大韓民国臨時政府の創設、1945年の朝鮮半島の情勢が説明される。そして、さいごの「第3章 米軍政～大韓民国時代」では、韓国建国から民主化までが対象範囲とされ、大韓民国の誕生、朝鮮戦争、李承晩政権から朴正熙政権までの独裁政治の状況、全斗煥政権以降1987年の民主化までの道程が叙述されている。

「第II部 政治」は浅羽祐樹氏が執筆している。まず、内政を対象とする「第4章 韓国という「国のかたち」」で、大統領制、司法制度、国民・市民の政治参加、自由民主主義体制、憲法体制、建国／光復／政府樹立をめぐる意見対立や判断基

準の差異がとりあげられる。なかでも、日本の読者にとっては、「韓国政治において大統領や国会、政党、有権者と並ぶ重要なプレーヤー」とされる憲法裁判所や、市民で構成する政策課題の検討機関である「公論化委員会」の機能や内実について、学ぶところが多いであろう。

「第5章 韓国外交における日韓関係」「第6章 南北関係と 코리아・ナショナリズム」では、韓国と日本および北朝鮮との関係が扱われる。

韓国と日本の関係にかんしては、慰安婦問題と徴用工問題、竹島（韓国では独島）問題について、経緯と双方の主張、第三者的視点からの見解などが述べられている。また、これらの問題については対立した状態にあるが、日韓が北朝鮮の隣国であることから、共有される「戦略的利益」はあるとの見方も示される。さいごに著者は、「3つの『たいしょう』という補助線を引き、日韓関係という立体像を著者なりに浮き彫りにしてみます」として、日韓関係の3つの特徴を提示している。1つ目は、日韓が「対称」的な政治・経済システムや生活水準を共有する関係であること、2つ目は、日韓が相互を他者として「対象」化する関係であること、3つ目は、日韓が相互を「対照」化する関係であること、である。

韓国（南）と北朝鮮（北）の関係については、南北関係の実態やグローバルな観点からみた朝鮮半島問題が説明されていて、2018年の南北首脳会談や米朝首脳会談についても詳述されている。北朝鮮に対する認識にかんしては、従来、「進歩」（日本では1980年代までは「革新」、90年代以降は「リベラル」）は北朝鮮には宥和的であるため、「統一」を「外交」「安保」よりも優先する。しかし、近年の20～30代の「進歩」は、「個人」「自由」「公正」を重視するため、それらの価値に相容れない対北朝鮮政策に賛同しない傾向があることが指摘されている。

「第III部 社会」は、金香男氏の執筆による。数ある社会事象のなかから3つの章でとりあげられるのは、経済と社会変動、家族、教育と就職事情である。

「第7章 変化する韓国社会」では、前半で、韓国の1960年代半ばからの経済成長と都市化、

近年の経済のグローバル化の様相が描かれている。また、その背景にある財閥や労働環境の実態とそれらが抱える問題について触れられている。後半では、経済や労働のありかたが生み出した社会変動として格差の拡大がとりあげられ、とくに、若者の生きづらさや、それを訴えるデモという形式の市民の行動の特徴が説明される。市民の社会参加を促す役割を果たしているのがインターネットであるが、その普及は、ネット上のシチズン（市民）である「ネチズン」を生み出した。「インターネットの掲示板やブログに書き込みをする人々」となっているかれらは、社会的影響力を強めている。一方で、ネット依存などの社会問題も起きている。

「第8章 韓国家族の「いま」」の前半では、韓国の家族の特徴である「家族主義」や「血縁主義」の解説からはじまり、家族の変容の過程と現状、現代の結婚の実態が記述される。2005年、家族主義を制度的に支えてきた「戸主制」が廃止された。これは、女性が家族から、また、社会や政治の場での「男性支配」から解放されたことを意味する。姓と本貫（一族の発祥地）が同じ男女の結婚を禁じる法律も、同年に廃止された。後半のトピックは、少子高齢化とグローバル化する家族である。高齢化に関連する問題として深刻なのは、高齢者の貧困である。また、国内の国際結婚家族や国外に移住・移民する韓国人の増加は、韓国社会が迎えている新しい局面である。

「第9章 韓国の教育と就職事情」の内容は、教育制度、受験と学歴社会、英語教育熱と早期留学、若者の就職難である。本章で韓国での教育制度の基礎的知識と特徴、若者の生きづらさを知ることができる。学歴社会における熾烈な受験戦争、それに起因する私的教育費の過剰な負担は、重要な社会問題のひとつである。小学校1年生から英語が必修となったことで英語圏への早期留学が急増したことは、経済的な問題や子どもの適応問題などの問題を引き起こした。若者の就職事情の厳しさは改善されず、かれらの将来観測のなかに希望を見出すことは難しい。

「第IV部 文化」の執筆者は春木育美氏である。ここでは、人びとの生活や人生の底流にある伝統

文化、外国との交流のなかで育まれる文化、新しいあり方を探っている文化がとりあげられる。

「第10章 再考される伝統」で扱われるのは、建国神話と陰陽五行、通過儀礼、食文化、年中行事で、これらの基礎的知識と現代の変容が説明されている。通過儀礼の部分では、「サラン」という名前の女性のライフコースが記述されるなかで、伝統的な通過儀礼とその現代の変容が解説される。食文化は外国人にとって比較的なじみのあるものであるが、韓国での犬食文化について知る人はそれほど多くないかもしれない。

「第11章 交差する文化」では、スポーツ、マスメディア、韓国の若者と日本文化、文化産業と大衆文化について述べられる。スポーツの国際大会は、韓国人が韓国民としての一体感を味わえる場であり、アイデンティティを再確認する場となっている。マスメディアは外国への情報発信の要であるが、新聞や放送局、それらと権力との関係についての詳しい説明によって、読者は韓国のマスメディアの実態を知ることができる。観光にかんしては、訪日韓国人観光客の約半数が20代以下で、世代が若いほど日本に好印象を抱いている。日本の小説やマンガは韓国で人気があり、韓流ドラマは日本をはじめとする諸外国で人気を誇っている。近年では、文化コンテンツのなかでも下火であった小説を外国に広めるために、翻訳を支援する政策がとられるようになってきているという。

「第12章 模索しつつある韓国」の内容は、整形、宗教、兵役問題、災害と危機管理である。本章では、身体・信仰・兵役・危機管理意識にかんする文化の実態や背景、要因について知ることができる。社会が要求する理想的身体に近づき市場価値を高めるために、また、他者からの承認欲求を満たすために、韓国で整形はごく一般的なものとして行われている。宗教の現状の特徴は、若年層と高学歴層の宗教離れと信徒の高齢化である。そのため、宗教団体は現状維持が困難になり縮小すると予測される。在日コリアンや国際結婚家庭の子ども、財閥ファミリー、スポーツ選手や芸術家は、それぞれの事情や思惑を抱えながら兵役と対峙している。セウォル号沈没やMERS（中東

呼吸器症候群) 感染などの社会的な大惨事で被害が拡大したのは、国家の危機管理体制の不備や不適切な対応だけでなく、個人の利益しか考えない公共性の欠如や個人の危機管理意識の低さも関係している。

入門書を書くことには、専門的な学術論文を書くのとはまた異なる苦勞がある。対象となる読者を、現代韓国についての知識を求める初心者と想定すれば、その知りたいという欲求を十分に満たすための内容と表現を提供しなければならない。これはそれなりに気配りの必要な仕事である。内容についてはおもしろさ、表現についてはわかりやすさが要素となるといえよう。これら要素は、本書の目的である「読者が韓国の実像を知る」「読者のさらに知りたいという意欲を掻き立てる」ことに貢献するものでもある。

本書のおもしろさへの気配りは、各章でとりあげられる事象の選定に表れていると思われる。朝鮮王朝末期の実像、日韓関係や南北関係の実像、学歴社会の実像、兵役問題の実像、などの事象。これらは、日本の読者がどこかで断片的に知識を得ている、しかし、深くは知らない場合が多い事象である。そのような事象を選定し、読者の知的好奇心に切り込んでいくというところに、おもしろさへの気配りが感じられる。もちろん、1冊の本で韓国のすべての事象を扱うことはできないため、著者の専門性との兼ね合いから選定される事象が絞られている点は限界ではある。おもしろさが誘因力となって、読者が、さらに知りたいという意欲をもち、本書で扱われない事象を知ろうと自発的に行動を起こすことが期待される。

わかりやすさについては、正確さや丁寧さ、読みやすさが大切であろう。これらについて、いくつか気づいた点がある。「第 III 部 社会」に「高学歴者を中心に福祉国家として知られているデンマークやスウェーデンなど、北欧の国々へ移民する 30 代、40 代が急速に増えています」とある。しかし、韓国も福祉国家であるため、北欧の国々については、表現を変えたほうがよいのではないかと思われた。また、「第 II 部 政治」では、金剛山の観光地としての開発について説明する部分で、「恨解(望郷)」という言葉が使われているが、文脈上の意味である「望郷」以外の説明は書かれていない。しかし、「ハン」あるいは「ハンプリ」の本質的な意味について説明が加えられていれば、読者は韓国を知るために必要な「ハン」という重要概念について知識を得ることができ、この概念にたいする誤解が生まれる可能性も防げるのではないだろうか。ほかにも、もう少し言葉を補ってもらえれば、さらに読みやすくなるのではと思われる表現が散見された。評者としては、わかりやすさについて、若干満たされない気分が読後に残った。

(株本千鶴 岡山女学園大学)

〈参考文献〉

- 石坂浩一・福島みのり編 2014. 『現代韓国を知るための 60 章【第 2 版】』明石書店。
伊藤重人編 1997a. 『もっと知りたい韓国【第 2 版】①』弘文堂。
伊藤重人編 1997b. 『もっと知りたい韓国【第 2 版】②』弘文堂。
小倉紀蔵編 2012. 『現代韓国を学ぶ』有斐閣。